

TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の


Funky Corner



文・撮影●波多 利朗 text and photo by Hata Toshiro
 (URL) <http://www.funkygoods.com/>
 (E-Mail) catty@mxp.mesh.ne.jp

幻の謎ば～機

「NEC VT1」


**TI-2500
 ヴィンテージ電卓のこと**

今回の前フリは、前号と同様また電卓のことについて書かせてほしい。進化のないヤツだと思われてもしょうがないけど書く。筆者がヴィンテージモデルの電卓収集を趣味としていることは、前号でもご紹介した。筆者はこれまでに様々なメーカーの電卓を買い漁って来たのだが、一番のお気に入りは何かと問われれば、迷うことなくTexas Instrumentsが発売したTI-2500シリーズをあげるであろう(写真A、B)。

その理由を一言で表現するのは難しいのだが、感覚的に表現するなら、たとえばカップラーメンならば元祖カップヌードル、スナック菓子ならばかっぱえびせん、クルマならFIAT500、秘湯なら小谷温泉、ロシアカメラならゾルキー1を選ぶ気持ちと、若干通じるものがあると考えている(よけいわかりにくい表現だな……。)。要はそういった基本を押さえた魅力といったものがこの製品には内在しており、それに強く引き付けられるからだろう(どこが基本なんだか……。^ ^ ;)。

さて、そのTI-2500であるが、これはTexas Instrumentsが1972年に149.95ドルで発売した同社最初の記念すべき電卓である。このTI-2500は1974年までの間に、合計6つのバージョンが発売されたそうだ。詳細は以下のとおり。

- TI-2500 Ver.1 (初代機)
- TI-2500 Ver.2

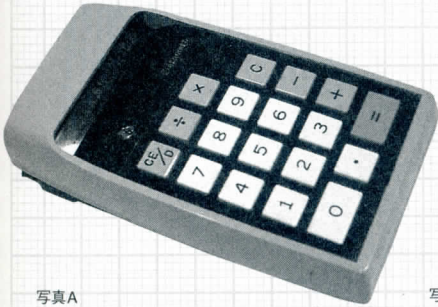
- TI-2500 Ver.3
- TI-2500B
- TI-2510
- TI-2500II

これらのうち、とくにTI-2500 Ver.3とTI-2510は滅多にお目にかかれない激レアモデルとしてマニアの間では有名である。筆者は苦勞の末、Ver.3を除いた全モデルを集めることができたのだが、Ver.3だけはいまだに入手できていない。今回ご紹介するのは、これまた希少性がかなり高いTI-2500 Ver.1、すなわち初代機である。

とにかくこのスペースエイジーな雰囲気満点の、コロコロしたまるっこいデザインがたまらない! まさに映画「2001年宇宙の旅」に出てきてもおかしくない逸品。そうそう、2001年といえ、この5月に銀座の映画館でリバイバル上映されたのを思わず見てしまい、類人猿が投げた骨が宇宙船と重なるあの有名なモンタージュシーンに改めて感動してきたのだが、その話は置いておこう。またこの電卓、配色もなかなかのもので、カラーでお見せできないのが残念デスと言いたくなるような絶妙なもののなのだ。

電源はニッカド充電電池6本使用。たかが四則演算を行うだけの機械なのに6本もの電池を使うとは、すごい超越している。表示は12桁の赤色LED表示。聞くところによれば、当時この電卓を開発した技術陣は、このモデルのLCD表示版を作ろうと苦勞していたそうである。しかし、ついに実用化することができなかったそうだ。キーは

ヴィンテージ電卓 TI-2500 初代機



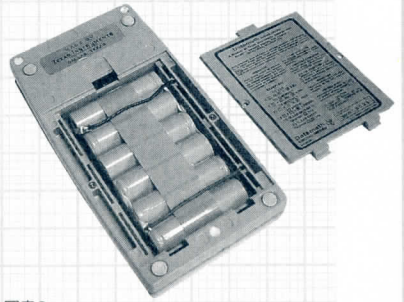
写真A
ヴィンテージ電卓「TI-2500」の外観

プラスチックのきょう体は非常に分厚く、存在感がある。なんといつてもこのスペースエイジ感覚に富んだデザインが最高！



写真B
TI-2500のLED表示

当時の電卓では一般的であった赤色LED表示を採用。表示は繊細かつ暖かみを感じさせる。今の電卓でも採用すればいいのにねえ……



写真C
TI-2500初代機の電池室内部

使用電池はナント！単三ニッカド充電電池6本。以後のバージョンでは4本に削減されるものの、それでも多いことには変わらないな



写真D
TI-2500初代機
(Ver.1)のパッケージ

元箱、取り説、ACアダプタ付きのコレクターズアイテムである

写真E
「Collector's Guide to
Pocket Calculator」表紙

電卓コレクター必見のカタログ本。これ1冊で、歴代ヴィンテージマシンのすべてがわかる究極のオタク本！



クリック感のある押しやすいタイプ。そして極めつけは独特のデザイン！ どうして現代にはこうしたデザインの工業製品が出てこないのかと、不思議に思ってしまう。筆者はたまたま本製品を元箱、取説付きで入手できた(マニアは嫌だねえ…… ^^ ;)。ちなみに筆者が入手したTI-2500の初代機は、1972年12月2日にイリノイ州ハイランドパークの某ショップにて129.95ドルで購入されており、信じられないことに、箱の中にはナント！購入者のクレジットカードの控えまで残っていた。物持ちの良いユーザだこと……。ポータブルタイプの電卓の歴史をそっくりそのまま内包したがごとき記念すべきこの製品、みなさまもぜひ一家に1台常備していただきたいものだ(写真C、D)。

さて、電卓についての話題をもう2つ。

ひとつは歴代のポータブルタイプの電卓をカタログ的に紹介した本「Collector's Guide to Pocket Calculators」である。著者はGUY BALLとBRUCE FLAMMの両氏。

どちらも著者紹介の写真を見ると、かなり重症の電卓オタクだ。この手の電卓を収集しようとされている方は座右の書として日夜枕もとに置くことをお勧めする。購入はAmazon.Comで可能。トップページのサーチ欄でGUY BALLと打ち込めば簡単に検索できる。価格は23.95ドル。ちなみにISBNナンバーは1-888840-14-5。波多利朗イチオシの推薦図書である！(写真E)

もうひとつは手前味噌で恐縮なのだが、まったく更新されない筆者のWebページ上に計算機コーナーを新設したことだ。ここでは電卓を始めとして、筆者がコレクションしている歴代計算機を、機械式も含めて順次紹介して行くつもりである。しかし、例によってHP制作に飽きてしなわなければの話だが……(また読者の方に怒られそうだなあ。 ^^ ;)。URLは下記のとおり。

<http://www.funkygoods.com/calc/index.htm>

NECが作った カルトマシン、VT1

さて、今回のお題目はNECのVT1である。本誌はかなりマニアックな雑誌であるため、多くの方がVT1という携帯端末をすでにご存知かと思われるが、念のため簡単に解説しておく。VT1とはNECが1995年に社内限定発売した携帯電子メール端末であり、その後のモバイルギアのパイロットモデルともなった製品である、以上。…

…ってこれぢやあ余りにも簡単すぎるな…… ^ ^ ; ;

(001)。

ところで、今回VT1をご紹介しますに至った経緯をちょっと述べてさせていただきたい。1980年、すでに人類は地球防衛組織シャドウを結成していた。そんなことはどうでも良いのだが(良くはないけど)、2001年春、モバイルプレスの春号も無事発売され、さてお次は何を組上に乗せようかとぼんやり思案をしていたとき、筆者はたまたま納戸の中を整理中であつた。さて、筆者宅の納戸であるが、これがもう魑魅魍魎の巣食う魔界村といった状態で、

いったいどこに何があるのやらさっぱり見当もつかないくらいカオシーだ。そのガラクタの山のなかから、ナント！新品箱入りデッドストックの「VT1」が発掘され、今回ご紹介しようと思ひ立った次第。なぜこんなモンがあつたのかは、あいにくとまったく記憶にない。実は筆者はこの新品VT1のほかに、使い込んでくたびれた同機種を2台所有しており、合計3台のVT1をコレクションしている、ってこういう機種を3台持っていること自体、やっぱ変だよなあ、俺…… ^ ^ ; ;

今となつてはカルトマシン以外の何者でもないVT1で



NECの「謎ば〜機？」VT1の外観
これを謎ば〜機と呼ぶかどうかは別として、少なくともマニアックな製品であることは確かであるNECのVT1

あるが、逆に本誌Funky Cornerにはうってつけである。そんなわけで今回このVT1のご紹介となつたのである。

さて、デッドストックされていたVT1の箱であるが、後継機種種のモバギの箱をひと回り大きくしたような感じである。オレンジ色の外装に「Made in TAIWAN」と記載されている点が、このマシンの素性を垣間見るようで、なかなか面白いものがある(002、003)。

梱包内容であるが、本体とユーザーズマニュアル、モデム用のモジュラーケーブル、ACアダプタ、単三乾電池4本、それにPC-VANの入会案内といった構成だ。PC-VANの案内が入っているところに、時代を感じさせる。

VT1本体の外観であるが、台湾の有名な謎ば〜機メーカー、TidalwaveのME-386とほぼ同じと言っても差し支えないであろう。実際両者を並べて置いてみると、その類似性が良くわかる。とくに本体裏面の造形(電池室や銘板の位置)などは、瓜二つだ。当然、手に持った感じも



VT1の元箱と梱包内容一覧
製品の梱包状況は、モバギとほとんど同じである



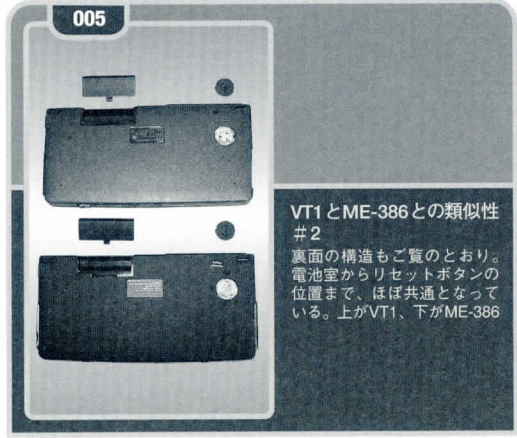
箱に印刷されている「Made in TAIWAN」の記載
このマシンの素性を垣間見るショット



004

VT1とME-386との類似性#1

左がVT1、右がME-386。大きさも基本的なデザインもほとんど共通



005

VT1とME-386との類似性#2

裏面の構造もご覧のとおり。電池室からリセットボタンの位置まで、ほぼ共通となっている。上がVT1、下がME-386

ほとんど同じ (004, 005)。

本体の色は若干青みがかったグリーンで、携帯端末としてはあまり見受けられないもの。ただし、モバイルギアの初代機である、いわゆる「青モバ」ほど青くはない。本体上面には「NEC」のロゴが添付される。

ME-386と異なる点で最も目につくところは、PCカードスロットが1基しか搭載されていない点である。本体向かって右側のスロットしか実装されておらず、左側スロットはあたかも後で塗りつぶされたように塞がっている。従ってカードイジェクト用のレバーも、本体右部分しか搭載されていない (006)。

本体背面には外部シリアルインターフェースコネクタが搭載される。モバギではこのコネクタは薄いタイプの専用コネクタになっているが、VT1では旧PC98系のノートに使用されていたコネクタと良く似たものが用いられている。なお、ME-386では、この部分にシリアルとパラ

レルの各コネクタが実装されていた (007)。

電池はメインバッテリーに単三乾電池を4本使用し、バックアップバッテリーにCR2032リチウムボタン電池を使用する。電源周りの仕様はME-386と同じであるが、VT1のCPUがV30であることを考慮すると若干大飯食らいのマシンといった感がしないでもない。この辺の省電力対策はあまりなされていないようだ。なお、メインバッテリー4本の格納方法もME-386のそれとまったく同じである (008)。

本体右側面には、PCカードスロットと内蔵モデムのモジュージャックが搭載されている。PCカードは実装すると端が若干(多いところで約3mm程度)本体からハミ出す。こういったところも、ME-386そっくりだ (009)。

本体左側面には、外部ACアダプタの入力ジャックがある。外部電源の仕様は、外側がマイナスの極性を持つ



006

VT1のPCカードスロット

VT1ではPCカードを1枚しか実装できない。この点がME-386と大きく異なる点



007

VT1とME-386のI/Oコネクタの比較

下がME-386、上がVT1のI/Oコネクタ。VT1は特殊形状のシリアルコネクタ1個のみ搭載されているが、ME-386は汎用形状のシリアルコネクタが実装される



VT1の電池室
電池の入れ方はME-386と同じ。単三乾電池4本を挿入する



PCカードスロットからハミ出すカード
ちゃんと挿し込んでもこのとおり3mmほどカードの端がはみ出してしまいうのはご愛嬌。ME-386と同じ特徴を見せている

DC6Vとなっている。

キーボードは当然であるが日本語キーボードで、制御キーも含め全部で81個ある。ME-386と類似する部分が多いVT1だが、キータッチはかなり異なり非常に品質が良い。ME-386が使われた方なら良くご存知だと思うが、

キーを押したときに若干ひっかかるような感触がVT1ではまったくといってよいほどない。この点を見るとVT1がキーボードによる文字入力を優先して作られたマシンであることが伺われる。高速で

タッチタイピングできるマシンとして、筆者は今でもDOS版モバギ(MC-MK11)を愛用しているのだが、VT1でもそれとほぼ同等の入力が可能なのである(010)。

キーボード上面には、「携帯電子メール端末 VT1」の記載があり、この携帯端末が電子メールのやりとりを主なターゲットとして作られていることを示している。本

体裏面の銘版シールには下記の表記があり、本体の製造が台湾であることが明記されている。

NEC VT1

定格 DC6V/3W

**使用電池 アルカリ乾電池
単三形 (LR6) × 4**

認定番号 S95-3077-0

日本電気株式会社 MADE IN TAIWAN

また、電池室内部には「5000473」の番号が記載されたシールが添付されていたが、これはおそらくシリアル番号であると思われる。

以下にVT1の仕様を示す。



VT1のキーボード
16mm程度のキーピッチが確保されたVT1のキーボード。タッチタイピングは快適に行える。キーボード上部に記載された「携帯電子メール端末 VT1」の文字が、このマシンの用途を明確に表現している

●VT1の製品仕様

製品名称	VT1
メーカー	NEC
CPU	V30 (9.3MHz/2.8MHz)【※注】
ユーザメモリ容量	770KB
キーボード	QWERTY配列JISキーボード (81キー)
液晶表示	640×200 モノクロCGA液晶、 アクティブエリア (172mm×65mm)
I/O	RS-232C×1 (特殊コネクタ形状)、 PCカードスロット×1
メインバッテリー	単三アルカリ乾電池×4
サブバッテリー	CR2032×1
外形寸法	245 (W) × 120 (D) × 30 (H) mm
重量	約700g (乾電池含む)
消費電力	約1.5W (最大3W)
電池持続時間	約15時間

※VT1のCPUクロックは、Landmark Research International Co. 制作の「Landmark System Speed Test Ver 2.0 (SPEED200.EXE) 1990」を使用して計測したものである。

VT1の内部構造と動作

それでは、VT1を起動させてみよう。VT1をリセットスタートさせると、下記のメッセージを出力し、EMSドライバやAIかな漢字変換ドライバ等を組み込んだ後、専用のメニュー画面を表示する。モバギではVademの486 BIOSのクレジットが出力されていたが、VT1はNECのクレジットのみ出力される。

```
NEC VT1 Ver 1.05    08/10/95
Copyright© 1995 NEC Corporation
```

モバギでは、UNISHELL.EXEという専用のシェルプログラムが実行されていたが、VT1では起動後DRSHELL.COMという名称のシェルプログラムが自動的に実行される。なぜDRSHELLなのかという素朴な疑問が残るお方は、かなりのDOSマニアだな、きっと。ちなみに、VT1に搭載されているROM-DOSは、MS-DOS Ver5.00であり、DR-DOSではない。なお、当然のことであるがメニュー画面が表示された状態では、どのような名称のシェルプログラムが走っているのかなんてことは、知る由もない。

VT1のメニュー画面には、10個の設定メニューが表示される。内容は下記のとおり。パソコン通信といったメニューがあるところに時代を感じさせる (011)。

電子メール	オートパイロット	パソコン通信	電卓
ワープロ	文書管理	アドレス帳	
スケジューラ	時計	PC連携	

上記キーのほかにファンクションキーに「ヘルプ」「パスワード」「設定」の3つの機能が割り振られる。

次にVT1のドライブ構成について見てみよう。VT1にはA、C、Dの3つのドライブがあり、それぞれ以下のような構成となっている。



・Aドライブ

1,104,896byteの内蔵フラッシュROMドライブ
メール等のデータ格納用
ディレクトリ構成は下記のとおり



・Cドライブ

3,858,432byteの内蔵ROMドライブ
システムファイル格納用
(読み取り専用で書き込み不可)
ルートディレクトリに100個ものプログラムが格納されている

・Dドライブ

PCカードドライブ

なお、筆者の所有するVT1のBIOSの日付けは1995年8月10日。Cドライブ (ROMドライブ) が作成された日付けは1995年8月25日。Cドライブに格納されているアプリケーションソフトのタイムスタンプは、1995年6月～8月のものがほとんどであった。

例によってDOSに降りよう!

VT1では、起動時に特定のキーを押すことによって、PCカードドライブに格納されている環境設定ファイルを読み込んで起動させることが可能である。その方法だが、本体リセットスタート時に「CTRL」+「C」キーを同時に押せばよい。すると、下記のメッセージを表示して、キーボードからの入力待ちとなる。

```
NEC VT1 Ver 1.05    08/10/95
Copyright (c) 1995 NEC Corporation
```

```
WHICH DRIVE 'CONFIG.SYS' FILE DO YOU SELECT ?
1. ROM DRIVE (C:)
2. PCMCIA CARD (D:)
```

ここで「1」キーを押せば、VT-1を通常起動させた状態 (DRSHELL.COMが起動した画面) が出力される。

「2」キーを押すと、PCカードドライブのルートディレ

クトリに置かれたCONFIG.SYSファイルを参照して起動する。したがって、ユーザオリジナルの環境設定を行うには、DドライブのルートディレクトリにCONFIG.SYSを置き、その中で設定すれば良い。なお、Cドライブ上にはAUTOEXEC.BATファイルが見当たらない。またDドライブのルートに同ファイルを置いて、なぜかVT1は実行しない。従って、AUTOEXEC.BATに設定するような項目（環境変数やパスなど）は、起動後、DOS画面のコマンドライン上で手動でAUTOEXECファイルを実行させる必要がある。この点については、挙動がかなり謎ば〜機能的と言えよう。

DOS画面に降りる場合には、まず適当なPCカードメモリ（フラッシュメモリカード）を用意する。容量は5MB以上あれば十分であろう。筆者はたまたま近くにあったNEC製の20MBフラッシュメモリカード（ATA）PC-9801n-J11（SanDiskのOEM品）を使用した。カードによっては認識されないものもあるようだ。実際秋葉原の某所で格安にて購入した、非常に怪しい4MBのノーブランドフラッシュメモリカードは、DOS版モバギでは認識できたのだがVT1では残念ながら認識できなかった、ってこんな怪しいカード使うほうも使うほうではあるが……。

閑話休題、PCカードが用意できたら、PCカードドライブ（この場合Dドライブ）のルートディレクトリに下記内容のCONFIG.SYSファイルを格納しよう。

* PCカードのルートに置くCONFIG.SYSファイルの例

```
FILES=30
rem SHELL=C:\VDRSHELL.COM ←専用のシェルプログラム
DEVICE=C:\VVG230L1M.SYS ←EMSドライブ
DEVICE=C:\VDRFONT.SYS ←フォントドライブ
DEVICE=C:\VDRD1SP.SYS ←ディスプレイドライブ
DEVICE=C:\VDRPASS.SYS
DEVICE=C:\VDRCARD.SYS ←PCカードドライブ
DEVICE=C:\VDRFREEZE.SYS
DEVICE=C:\VKKCFUNC.SYS ←ご存知KKCFUNC
DEVICE=C:\VNECA1K2.DRV
DEVICE=C:\VNECA1K2.DRV C:\VNECA1.SYS
INSTALL=C:\VKEYB.COM JP,932,C:\VKEYBOARD.SYS
```

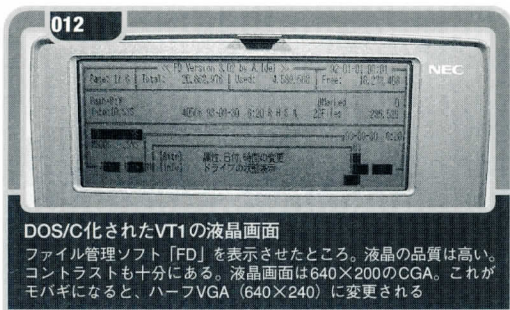
上記のCONFIG.SYSファイルは、実は何のことはないVT1の内蔵ROMドライブ（Cドライブ）に格納されているファイルをコピーして修正しただけのもので、シェル指定行のみをコメントアウトしたのとなっている。この状態でPCカードをVT1のスロットに挿し、本体リセットスタート時に「CTRL」+「C」キーを同時に押して起動ドライブメニューでPCカードを指定すればDOS画面が出力されるはずだ。この状態でVT1は本体内蔵のディスプレイドライブとフォントによって日本語化されており、キーボードも日本語対応となっている。どう？ 簡単でシヨ？ (013)

🔧 日本語FEPの組み込み

さて、ここで問題となるのはFEPである。上記のCONFIG.SYSでは、NECのAIかな漢字変換ドライブがすでに組み込まれているのだが、FEPの起動ができないのだ。キーボード上にもFEP起動に関係するキーは無く、おそらくVT1では専用のシェルがソフトウェアでFEPのOn/Offを制御しているのであろう。

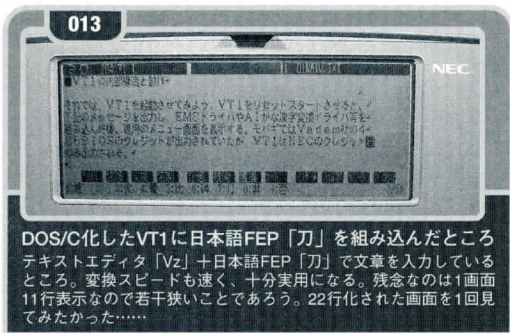
そこで、謎ば〜機用のFEPとして良く使われるWX II + (Ver2.70)を組み込んでみたのだが、ここでも問題が発生した。FEPは正常に組み込み、「メニュー」+「スペース」キーでOnにすることもできるのだが、変換中の文字が表示されない。おそらくVT1の液晶表示がモノクロ2階調であるため表示されないものと思われる。WX II +の環境設定ユーティリティ（要VGA画面）を使って色の設定を変えてみたのだが、やり方が悪いのかどうもうまく行かない。そこで、これもまた謎ば〜機で良く使用されるFEP、「刀」を使ってみた。

日本語FEP「刀」については、いまさら説明するまでもないくらいの有名なFEPなので説明しない、と言いきってしまうのは何だから、簡単に解説しておくならば、サムシンググッドが発売した軽量小型なFEPである。今回はVer.4（DOS/V版）を使用した。このFEPは以前Lexicomp



012 DOS/C化されたVT1の液晶画面

ファイル管理ソフト「FD」を表示させたところ。液晶の品質は高い。コントラストも十分にある。液晶画面は640×200のCGA。これがモバギになると、ハーフVGA（640×240）に変更される



013 DOS/C化したVT1に日本語FEP「刀」を組み込んだところ
テキストエディタ「V2」+日本語FEP「刀」で文章を入力しているところ。変換スピードも速く、十分実用になる。残念なのは1画面11行表示なので若干狭いことであろう。22行化された画面を1回見てみたかった……

製謎ば〜機LC-8620の回でもご紹介したことがある。

「刀」を使用するためには、DドライブにKTN4というディレクトリを作成し、そこへ下記ファイルを格納する。

KTN4C	.SYS	31,355	95-07-15	4:09
KTN4	.SYS	32,667	95-04-15	4:09
BSH	.DIC	29,696	94-07-01	4:09
KTNSMALL	.DIC	410,624	92-01-01	4:24
PHN	.DIC	22,528	94-07-01	4:09
TMP	.DIC	144	92-01-01	4:24
USR	.DIC	3,072	94-07-01	4:09
ZIP	.DIC	18,432	94-07-01	4:09
KTN4	.CFG	4,398	92-01-03	0:56
KTN4KEY	.CFG	3,571	94-07-01	4:09

また、VT1の液晶表示に対応するため、KTN.CFG ファイルを編集し文字色が見やすく表示するよう設定する。以下は筆者の設定例である。これをやらないと、変換中の文字等が表示されない。また、必要があれば辞書パッファの割り当て等をカスタマイズしておこう。

* KTN.CFGの設定例 (ファイルの一部のみ掲載)

```
;変換中の色指定
; Katana(刀)の変換中の文字色指定を行ないます
; C0 : 変換文節部
; C1 : 変換文節部カーソル
; C2 : 入力部
; C3 : 区切り範囲部
; C4 : 入力部カーソル
; C0=色番号 の様に指定します
;
; 色番号表: | 通常 反転 下線
;
;      +-----+
;      | 黒 | 0 | 8 | G |
;      | 青 | 1 | 9 | H |
;      | 赤 | 2 | A | I |
;      | 紫 | 3 | B | J |
;      | 緑 | 4 | C | K |
;      | 水 | 5 | D | L |
;      | 黄 | 6 | E | M |
;      | 白 | 7 | F | N |
; (エミュレート拡張CGAテキスト・モード以外では下線は表示されません)
C0=F
C1=F
C2=N
C3=F
C4=F
```

次に、DドライブのCONFIG.SYSに、下記の2行を追加する。

* 刀を使う場合にCONFIG.SYSに追加する行

```
device=d:\ktn4\ktn4.sys /F=d:\KTN4\KTN4.CFG
device=d:\ktn4\ktn4c.sys /F=d:\KTN4\KTN4.CFG
```

以上で、「とりあえず」刀が使えるようになる。ここで「とりあえず」と書いたのは、上記設定でも部分的に表示されないところがあるからだ。しかし実用上慣れてしま

えば問題ないレベルであると思っているので、ラテン系な筆者は「これでよし」としている。Vzエディタもほぼ問題なく動くので(スクロールすると画面にゴミが残るが、我慢して使えるレベル)、これで筆者的には実用的なマシンに仕上がった(筆者の携帯マシンに対する要求事項は、それほど高くない。テキストエディタがサクサク動き、高速タッチタイピングできるキーボードを搭載し、電池がそこそこ持続しておかつ小さければ、それで満足ののである)。

ただし、この状態では画面が11行表示となっている。さらに最下行はFEPの制御行として使われてしまうので、実際に使えるのは10行のみだ。これではさすがに表示量が少ない。実は22行表示にする方法(プログラム)もあったそうなのだが、あいにくと今回評価することができなかった。

最終的に設定したCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATの両ファイルを、下記に示しておく。CONFIG.SYSファイルでは、WX II +を使用したときの残骸が残っているので、そのつもりで。

* 「刀」を使用した時のCONFIG.SYSの内容

```
BUFFERS=20
FILES=30

rem SHELL=C:\VDRSHELL.COM
SHELL=C:\YCOMMAND.COM

DEVICE=C:\VVG230LIM.SYS
DEVICE=C:\YDRFONT.SYS
DEVICE=C:\YDRDISP.SYS
DEVICE=C:\YDRPASS.SYS

DEVICE=C:\YDRCARD.SYS
DEVICE=C:\YDRFREEZE.SYS
DEVICE=C:\YKCFUNC.SYS
device=d:\dos\ansis.sys

rem DEVICE=C:\YNECA1K1.DRV
rem DEVICE=C:\YNECA1K2.DRV C:\YNECA1.SYS

INSTALL=C:\YKEYB.COM JP,932,C:\YKEYBOARD.SYS

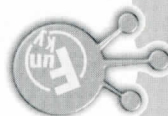
rem device=d:\wx2\wxk.sys
rem device=d:\wx2\wx2.sys /Dd:\wx2\wx2.dic /VF /N

device=d:\ktn4\ktn4.sys /F=d:\KTN4\KTN4.CFG
device=d:\ktn4\ktn4c.sys /F=d:\KTN4\KTN4.CFG
```

* AUTOEXEC.BAT ファイルの内容

```
prompt $p$g
path = d:\;d:\bat;d:\bin;d:\dos;d:\vz;d:\wx2;
```

FEP「刀」を組み込んだ状態でのメモリマップをVMAPで調べた結果を下記に示す(を!) コンベンショナル



メモリアが約504KB程度も空いているぢゃないか！つて、今時コンベンショナルメモリってのも死語だよなあ。「刀」もちゃんとEMSメモリに入っていて、気持ちが良い。

*** VMAPコマンド実行結果**

```
VMAP Version 2.01 Copyright (C) 1989-91 by c.mos
addr PSP blks size owner/parameters hooked
vectors
```

0C0D	sys	1	10592	vg230lim	67
0EA4	sys	1	160	drfont	
0EAF	sys	1	480	drdisp	7D
0ECE	sys	1	18928	drpass	08
136E	sys	1	6176	drcard	
14F1	sys	1	80	drfreeze	
14F7	sys	1	3952	kkcfunc	
15EF	sys	1	4336	ansi CON	1B 29
16FF	sys	1	7792	ktn4	
18E7	sys	1	9248	ktn4c	10 15
1B2A	sys	4	12832	<config>	
1E50		1	192	<free>	
1E5E	<-	1	8432	keyb JP, 932, C:WKEYBOARD.S	09 16 2F
206E	<-	2	5024	command	22 23 24
21AA-9FC0		1	516448	<free>	


```
----- EMS ver4.0 (frame: C000h) -----
handle pages size name
```

1	4	64k	KTNK4.09
2	3	48k	KTNC4.09
free	5	80k	
total	20	320k	

*** ME-386でのCPUBENCH結果**

```
80X86 CPU Speed TEST v0.980 Copyright 1992 ZOBplus Hayami
DHRYSTONE 30000 LOOPS
Execute memory area: 3000:0000 ->3000:1C28
CPU Type: i386SX Not FPU Real mode

Ratio to the first PC9801 : 2.24
Execute time : 30.84 sec.
```

*** モバイルギア (MC-MK12) でのCPUBENCH結果**

```
80X86 CPU Speed TEST v0.980 Copyright 1992 ZOBplus Hayami
DHRYSTONE 30000 LOOPS
Execute memory area: 3000:0000 ->3000:1C28
CPU Type: i486SX Not FPU Virtual86 mode

Ratio to the first PC9801 : 20.56
Execute time : 03.36 sec.
```

🌀 おわりに (どうでも良いこと。)

ベンチマークテストという言葉聞いて突然思い出してしまったのが、DOS/V初期のころ秋葉のショップの店頭で必ずと言っていいくらいデモしていたグラフィック機能のベンチマークテスト、「3DBENCH」である。考えてみるとあの「HAL」という文字がくるくると回っていたところがDOS/Vが最もおもしろかった時代ではなかっただろうか？

ジャンク屋には怪しい廃品放出品があふれ、やれS3だET4000だPOWER9000だ911だ924だ928だといった会話がそこかしこで囁かれ、VLバスの拡張カードの抜き差しで手を痛めた人が続出し(そんなヤツイねえよ!), 某PCショップの元バナナの貯蔵庫であった地下ジャンク売り場には、その名も「廃人の棚」が設けられ、自作マシンの互換性問題を解決するため徹夜作業を強いられた疲労困憊の極みにある廃人が焦点の定まらない死んだ魚のような目をして秋葉原を徘徊し、怪しいPCショップの店頭には、はるか台湾・香港から輸入されてきた使い方もわからないような初めて見るパーツが所狭しと並び、UNIXヲクタクな人は艱難辛苦をもとせず、安く組み立てたATマシンに総計50枚を越える5インチFDをとっかえひっかえドライブに挿入して386BSD Ver0.1 + XFree86をインストールしては喜んでいて、そんな時代である。

どの分野でもそうだが、市場が成熟してしまうとつまらなくなるものだ。部品を買い漁って自作マシンを作り、チューニングのため改造を施し、改造したため余った部品で狂ったようにまた1台マシンを作り、そのマシンをまた改造し、それで余った部品を使ってこれまた狂ったように3台目マシンを作るという、あのあたかも恐山の石積みのごとき無限ループ地獄の情熱と快感をいま一度味わって見たいと思うのは、筆者だけであらうか？

🌀 マシン性能は？

最後に、このVT1というマシンのベンチマークテスト結果を掲載しておこう。外部ACアダプタ非接続時にCPUBENCHという(ちょっと古い)計測ソフトを使って計測した結果が、下記である。比較参考のため、TidalwaveのME-386と、NECのモバイルギア(MC-MK12)の結果も掲載しておく。CPU単体での性能を比較した場合、MC-MK12では、VT1の、なんと23.6倍もの性能になっていることがわかる。なお、ベンチマークテストとしてその昔有名であったPFM486は、VT1で使用されているCPUがV30と非常に古いため、計測することができない。

*** VT1でのCPUBENCH結果**

```
80X86 CPU Speed TEST v0.980 Copyright 1992 ZOBplus Hayami
DHRYSTONE 30000 LOOPS
Execute memory area: 4000:0000 ->4000:1C28
CPU Type: V30 Not FPU

Ratio to the first PC9801 : 0.87
Execute time : 1 min. 19.04 sec.
```